



知事が行く!  
突撃取材! Part2  
～三重のひと～

第1回

このコーナーでは、知事が県内各地にでかけ、夢を実現するため、三重を舞台に頑張っている人たちを紹介します。

～めざせ!伊勢型紙職人～ **女性2人が夢を追う!**

インタビュー詳細版

(聞き手) 三重県知事 鈴木英敬

(お話いただいた方) みやざき 宮崎なつみさん

やまきたたま 山北珠深さん

きむらまさあき 木村正明さん



《左：みやざき宮崎なつみさん、中央：やまきたたま山北珠深さん》

知事：では、まず山北さんと宮崎さんのお二人にお伺いしたいと思います。

お二人は2年前から伊勢型紙の修行をされていますが、伊勢型紙の職人になりたいと思ったきっかけは何ですか？まず山北さんからお願いします。

山北：私は小学生の頃から切り絵をやってたんです。専門学校へ行ってもずっと切り絵で作品を作り続けていて、そのまま伊勢型紙にも興味を持ちやりはじめたのがきっかけです。

知事：伊勢型紙自体を知ったのはいつ頃ですか？

山北：専門学校の時に教えていただきました。

知事：なるほど。出身は岐阜でしたよね？

山北：はい、岐阜県大垣市です。

知事：大垣市の専門学校へ行ったわけですか？

山北：専門学校は名古屋でした。

知事：なるほど。それで伊勢型紙を知ったわけですね。

では、宮崎さん、伊勢型紙の職人になろうと思ったきっかけは？

宮崎：もともと別の会社で働いていて、転職を考えている時にたまたま見つけたんです。

知事：たまたま見つけた。

宮崎：漠然と、ものづくりの仕事がしたいと思っていて、探していた時に「あ、伊勢型紙や」と思って決めました。出身が鈴鹿なんで小さい頃から学校の体験とかも多いんですよ。鈴鹿を出て行く気もなかったし、伝統工芸ってちょっと良いなあと思って、じゃあやってみようかなっていう感じです。山北さんと比べるとかなりライトな感じで。

知事：いやいや。前はどのようなお仕事だったんですか？

宮崎：運送屋さんで事務員やってました。

知事：なるほど。でも、鈴鹿で生まれ育って、小さい頃から鈴鹿にこういう伝統工芸があるということとを教育上知っていたから、選択肢の一つに上がってきたというわけですね。

宮崎：そうですね。

**知事**：そういう意味では、郷土を知る教育は大変重要だということですね。

**宮崎**：はい。

**知事**：はい、ありがとうございます。

ところで、どうですか？2年間修業されてきて感想は。じゃ、今度は宮崎さんから。

**宮崎**：はい。やってみて、良くも悪くもギャップをいろいろ感じました。

**知事**：良くも悪くもというと？

**宮崎**：思ったよりやる事が多いなって。

**知事**：例えばどんなことですか？

**宮崎**：道具を作るのもそうなんですけど、結構簡単に考えていたところがありました。

道具は壊れたら作り直すんです。すぐ折れる、じゃまた作ろうかみたいな感じで。

すぐにできるのかと思っていたら、道具一本を作るのに一日がかりだったりするんですね。

**知事**：なるほど。

**宮崎**：道具がよく切れるように研ぎを入れるのも大変だし、焼き入れとかいろんな作業があって、彫るだけが職人じゃないんだということを感じますね。

**知事**：なるほど。それは良くも悪くものどっち？良い方のギャップですか？悪い方のギャップですか？

**宮崎**：どっちかという悪い方かな。

**知事**：では、良い方のギャップはどんなことですか？

**宮崎**：良い方はですね、柄のすごく細かいのを知らなかったんです。私が知っていたのは色紙用の結構粗い柄とか、着物の大きい花の柄とかそういうので、見た時にこんな細かいのがあるって知って。私、あんまり視力良くないし、こんなの彫れるの

かなって思ったんですけど、結構何回もやっているうちに細かい柄や綺麗な柄も彫れるようになってきて、一般の方が体験されている型とは違う経験ができてるなあみたいところはちょっとうれしく思いますね。やっぱり職人にならないとできない部分というか、そういうのを知ることができたのはうれしいなって思いますね。

**知事**：なるほど。柄の多彩さとかそういうのもわかったんですね。

山北さんはどうですか。

**山北**：私も宮崎さんと一緒にギャップはあったんですけど、もともと切り絵をやっていたのでちょっと自分に自信があったんですよ。で、研修をやってみたら思いのほか綺麗に彫れなくて、ただ彫るだけじゃなくて、植物の一個一個をその形らしく彫っていくのがすごく難しいなっていうのがだんだん分かってきました。また、道具作りも小刀がなかなか上手く研げなくて、きれいなものを彫るには道具作りの基礎をしっかり身に付けておかないといけないなって、今まだ勉強中です。



**知事**：そのものの形らしくってというのは、例えば、僕が今さっきナスをね、その黒い所を必死で彫ってみましたけど、そういう単に形を合わせるだけじゃなく本物みたいということね。

**山北**：そうですね、はい。

**知事**：深いね～。なるほど、そうですね。この2年間やってみて、今も勉強中の身なんでそういう答えでしたけど、逆に2年間の中で達成感や、やりがいを感じたこととか、そういうのはどうですか？

**山北**：やりがいはそうですね、以前作っていた切り絵の作品と比べると、本当にうまく綺麗にできるようになったので、その点はすごくうれしいですね。

**知事**：やっぱり達成感はありますか？

**山北**：はい。

**知事**：なるほど。

抽象的な質問ですけど、お二人にとって伊勢型紙の魅力は何ですか？

**山北**：そうですね。機械じゃ表せない、自分の手で彫っていくので人の温もりがあるんじゃないかなと思います。

**知事**：人の温もりね。深いね。

**山北**：そのへんが素敵ですね。

**知事**：なるほどね。宮崎さん、どうですか？

**宮崎**：はい。伊勢型紙には多彩な柄があるんですけど、自分がちょっとこう変えたいなと思うと、いろんな形に無限に模様が広がっていくというところだと思いますね。いろんな可能性を秘めているというところが魅力的だなと思っています。

**知事**：深いね、2人とも。

無限の広がりということは、同じ夫婦岩でも職人によって違うわけですね。世界唯一の作品ということですね。

**山北・宮崎**：そうですね。

**知事**：で、またいろんな形に広がっていく。すごいな、ええ話や。

では、将来どんな作品を作っていきたいと思いますか？ 山北さんからどうぞ。

**山北**：私は、専門学校で絵の勉強もしていたので、自分で柄を作ってそれを型紙にしていきたいなと思っています。デザインの勉強をもうちょっとしたいと思っています。

**知事**：こんな感じのデザインのものを描きたいとか何かあるんですか？

**山北**：そうですね。やっぱり型紙を見るのは年配の方が多いので、若い方を中心とした何かもっと、



《山北さんの作品（引き彫り）》



《宮崎さんの作品（道具彫）》

かわいらしい物とか。

**知事**：それやな。

**山北**：注目してもらえる物をデザインして彫っていきたいです。

**知事**：それや、それいこう。本当に。僕も知事として、伝統工芸の方とお付き合いもさせてもらってるんですけど、これからはいろんな世代の人たちが親近感を持てるようなデザインとか、発信を、やっぱりせなあかんよねっていうことはよく言うんでね。型紙にもそれがあるといいよね。なるほど、いいと思います。

どうですか、宮崎さん、将来どんな作品を。

**宮崎**：そうですね、私は、すごく細かい柄を彫れるようになって、伝統工芸、若い人もこれだけ彫れるんだよって、そういう技術を受け継いでいきたいなと思っています。

**知事**：なるほど。彫る技術の高みをめざすということですね。すばらしいな。

ええ答えでましたけど、師匠。次は師匠のお話を聞きたいと思います。

伝統工芸は伊勢型紙に限らず技術の継承が課題になってるわけですけど、こういう若い二人が夢を抱いてここに入ってきてくれたことにどのような思いですか？

**木村**：伊勢型紙にとってはね、2人が入ってきてくれるっちゅうことはとてもうれしいことでね。もう大事に、伊勢型紙の宝やでね。やっぱり一からきちっと教えて、それをずっと継承してってもらわんならんでね。

**知事**：なるほど。

**木村**：せやないと伊勢型紙が無いようになってしまふでね。

**知事**：伊勢型紙の伝統工芸士の平均年齢ってというのはどれくらいなんですかね。

**木村**：平均年齢は、もう70くらいですかね。

**知事**：女性の職人は多いですか？

**木村**：今はね、女性の方が多いですね。

**知事**：今は女性の方が多。ほんなら、またそういう意味では変わってきますね。

**木村**：そうやね。

**知事**：作風とかも変わってくるかもしれませんな。

**木村**：教える方も難しいんですわ。

**知事**：男性が女性に教えるのは難しい？

**木村**：そう。男性ならね、昔は徒弟制度というのがあって、少々頭小突いてもよかったけども、まさか女の子の頭小突いたら、すぐいなくなるでね。

**知事**：なるほど。でもね、今、例えばサッカーなでしこジャパンの佐々木監督とか、女性を教えている男性も素晴らしいと思いますから、師匠もそんな感じでね。

**木村**：そやね。これから大事にして覚えてもらわなならんもんで。

**知事**：さっきお話いただいたことと若干重複するかもしれませんが、二人への期待とアドバイスみたいなものをそれぞれにちょっと言ってもらってよろしいですか。

**木村**：山北さんは、やっぱり切るもんが一番大事やでね。一番最初きちんと小刀を研ぐのを教えてい



きむらまさあき  
《右：木村正明さん》

かんと。彫るのは自分でいろいろ工夫して彫っていきけるでね。もうそれは期待してま  
すけどね。

**知事**：彫るのは期待しているので、その研ぐ部分  
のところをしっかりとれるようになってほ  
しいというアドバイスですな。

**木村**：これは引き彫りと突き彫りと二つあるでね。  
両方ともマスターしてもらわんといい仕事  
ができないから。

**知事**：なるほど。ですって。

**山北**：はい。

**知事**：どうですか、宮崎さんには。

**木村**：宮崎さんも、やっぱり道具を作ってもらわな。道具が一番大事やで。彫るのは経験でこれから  
なんぼでも上手になるでね。道具を作るのをやっぱり一番にやってもらわんと。結局、道具作  
るっちゅうのは加治屋（かじや）さんをせなあかんわけ。焼きも入れやんならんし、叩かん  
ならんし。研ぎもせんならんし。それだけ覚えるのでも4～5年かかる。

**知事**：僕も知事になって結構、伊勢型紙の勉強させていただいたりしましたけど、道具をそれぞれ作  
るというのは初めて知りました。

**木村**：これをね、人に作ってもらてたんではいい仕事はできないんでね。

**知事**：なるほど。ですって。

**宮崎**：はい。

**木村**：これはもう自分で、ここが悪かった  
らここを直さんならんし、切れなか  
ったら研がんならんし、そういう事  
を全部やってもらわんといい仕事は  
できない。

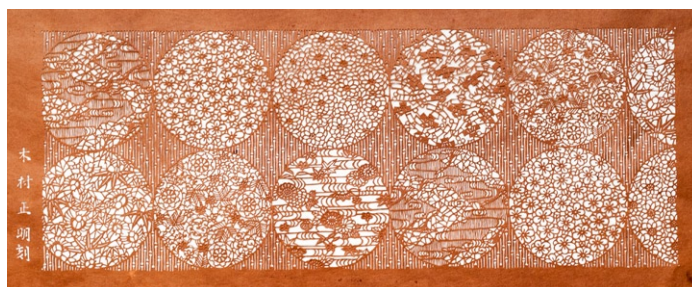
**知事**：なるほど。ありがとうございます。

そして師匠、この5月に開かれるサ  
ミットで、全世界のメディアに配られる三重県の  
情報誌がここにあって、師匠のところになかたひでとし  
中田英寿  
さんが来てくれてるわけですけど、伊勢型紙の海  
外発信あるいは今回のサミットに期待すること  
かどうかどうですか。

**木村**：グラスマーカーとかね、そういうので伊勢型紙を  
もっと宣伝せんといかんと思う。

**知事**：なるほど、グラスマーカーね。

**木村**：グラスマーカーとかコースターね。いろいろと型  
紙使ってやってますけどね。



きりぼり  
《木村さんの作品（錐彫）》



つきぼり  
《木村さんの作品（突き彫）》

**知事**：我々もまだちょっと上手く申し上げられないんですけど、型紙を重要な場面でね使ってもらおう  
よう今、外務省や官邸にも働きかけていますんでね。サミットを契機に伊勢型紙を世界に発信  
できるといいですね。

**知事**：山北さん、三重県では結構移住促進とか、Iターン、Uターンにも力入れてやってるんです。  
岐阜県から三重県に住んでいただいて、どうですか。

**山北**：そうですね。大垣もこことあんまり変わらないので、住みやすいですし、あと海があるので最  
初に来た時すごく楽しかったです。

**知事**：そうやね。ここ岸岡からやとちょうど高台で海が見えるしね。

**山北**：はい。

**知事**：このへん、ちょっと上がったところのカフェなんかからやとめっちゃきれいに見えるもんね。  
ええことやん。住みやすいし、海があつていいと。どうですか、三重県の食べ物で一番おいし  
いと思ったものは。

**山北**：そうですね。前に友達と伊勢うどんとか食べに行ったり。

**知事**：伊勢うどんおいしかったですか。

**山北**：はい。

**知事**：ありがとうございます。三重県に移住してみたの良さをいろんな人に言ってもらえると、また  
三重県への移住も増えると思います。ぜひよろしくお願いしますね。

今日はどうもありがとうございました。

**一同**：ありがとうございました。



※インタビューの内容は、読みやすさの観点から一部要約等を行っています。  
※記載内容、写真の無断転載を禁じます。  
※内容に関するご意見・お問い合わせは、三重県戦略企画部広聴広報課まで

〒514-8570三重県津市広明町13  
☎ 059・224・2788 FAX 059・224・2032  
E-mail koho@pref.mie.jp